



TITLE:

遼朝三省攷

AUTHOR(S):

島田, 正郎

CITATION:

島田, 正郎. 遼朝三省攷. 東洋史研究 1968, 27(1): 65-90

ISSUE DATE:

1968-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152761>

RIGHT:

遼 朝 三 省 攷

島 田 正 郎

目 次

はじめに

I 問題の所在

II 敘任事例の整理 附附表

III 國初の政事令

IV 創置の政事省

V 改稱後の中書省

VI 中書省の諸職官

VII 門下省と尙書省

むすび

はじめに

私は、この數年間、遼朝官制の全般的な研究を試みたいとして、法制史研究第一二に掲げた「遼の北面中央官制の特色」を序説として、各論ともいふべき個別な官制についての考えを、明治大學の法律論叢に總計八篇公表して來た。^①「遼朝三省攷」と題する本稿も、その一連のものの一つにはかならず、その順序にはかならずしもこだわることなく、推敲をおえ

たものから逐次公表して、結果として官制の全般に及ぼうとする、當初の構想はいまもかわらない。ただ、これまで公表したものが、だいたいにおいて先人の論じて及ばれなかった方面であるのに對し、本稿で扱うところには、津田左右吉博士の「遼の制度の二重體系」（同全集卷二三所收）と若城久治郎氏の「遼の樞密院に就いて」（滿蒙史論叢第二所收）の二雄篇がすでにあり、ことさらに新しい史料があるわけでもなく、また基本的に私見が兩論文といちじるしく異なるわけでもない。それにもかかわらず本稿を公表しようとしたのは、兩論文の目的が三省の究明とは別のところであり、從つて關係史料の全部が検討の對象となつたわけでもないので、基本的・概括的な考え方に差異は乏しくとも、そこに到達する經過や微細な點になると、かなりの懸隔のあることを認めないわけにいかない。そのうえ、三省が中國王朝の制の模寫にすぎなかつたにしても、その顯要な職官への任用となると、獨自なかたちのとられたことが立證できるから、結果として私の企圖する遼朝の性格の解明に資し得ると考えたからである。

本稿は、三省のうち最も重要な中書省を中心に論ずる。ほんらいならば兩論文との一致點と相違點とを、一々はつきりさせながら論を進めるのが至當であるが、それではかえつて論旨をはつきりできないうらみがあるので、禮を失することをおそれながらも、一々は明記しなかつた。津田論文とくに六・南面官と契丹人の章、および若城論文とくに一・南樞密院と兵事および文證の章と、對照のうえ批判を加えられたい。

I 問題の所在

遼史卷五・世宗本紀一、天祿四（九五〇）年二月の條に

是月。建政事省。

といい、同書卷一九・興宗本紀二、重熙一二（一〇四三）年二月戊申の條に

改政事省。爲中書省。

とあるのを受けて、同書卷四七・百官志三、南面朝官・中書省の條にも

初名政事省。太祖置官。世宗天祿四年。建政事省。興宗重熙十二年。改中書省。

と、略々同様の記載がある。百官志三の南面官の序には

大同元（九四七）年。世宗始置北院樞密使。明年。世宗以高勳爲南院樞密。則樞密之設。蓋自太宗入汴始矣。天祿四年。建政事省。於是南面官僚可得而書。

と見え、同じく南面朝官の序には

遼有北面朝官矣。說得燕代十有六州。乃用唐制。復設南面三省・六部・臺院・寺監・諸衛・東宮之官。誠有志帝王之盛制。亦以招徠中國之人也。

とある。これによってこれを見ると、太宗の世代に華北の一部を領有して、漢地漢人の統治が直接の課題となるに及んで、唐制に倣って南面の諸官を整え、國初以來の二元的な統治制度を確立し、その頂點に立つものとして、南樞密院（又は漢人樞密院）を設けたことが明らかである。後に中書省と改められた政事省が、このとき三省の一つとして、南樞密院の下に設けられたことも、疑いなきにちかい。しかし百官志に見える中書省の諸職官が、このとき置かれたとは考え難く、重熙一二年の政事省から中書省への改稱を、單なる名稱の變更とするには問題があり、また前引の南面朝官・中書省の條にも、「太祖置官」といい、紀・傳にも政事省の長官と目される政事令に任じられた事例が、太祖朝にも認められるから、天祿四年の政事省創置の意味も問題としなければならない。

以上提起した諸問題の究明が、遼制における中書省（又は政事省）、ひいては三省に關して論ずるさいの軸になると考えられるが、私はまず當代のあらゆる史料から、中書省（又は政事省）に關する凡ての記載を抽出し、これに整理を加えて、問題の究明に資したいと思う。

Ⅷ 道 宗	Ⅶ 興 宗	Ⅵ 聖 宗	Ⅴ 景 宗	Ⅳ 穆 宗	Ⅲ 世 宗	Ⅱ 太 宗
(1) ⊕ 延 禧		(1) 隆 慶	(2) (1) 撻 隆 烈 先	(3) (2) (1) ⊕ 敵 婁 阿 烈 祿 國	(1) 頽 昱	
		(7) (6) (5) (4) (3) (2) 室 阿 求 斜 控 普 沒 魯 里 翰 軫 溫 寧		(5) (4) 夷 壽 臘 葛 遠		
(2) ⊕ 革	(1) 孝 友 ⊕	(9) (8) ⊕ 孝 朴 先	(3) 幹	(6) 排 押		
		(11) (10) ⊕ 弘 烏 義 古	(4) ⊕ 安 搏	(8) (7) 阿 眉 不 古 底 得		(1) 僧 隱 ⊕
(8) (7) (6) (5) (4) (3) ⊕ ⊕ ⊕ ⊕ ⊕ ⊕ 趙 寶 姚 楊 杜 牛 徽 振 景 哲 溫 舒		(12) 張 儉 ⊕				
	(2) 馬 保 忠	(17) (16) (15) (14) (13) 韓 韓 劉 孫 室 制 德 延 孫 室 心 讓 構 禎 昉	(6) (5) 高 郭 勳 襲			(3) (2) 趙 王 延 郁 壽 ⊕
			(8) (7) 女 胡 里 魯 古			

IX 天祚帝		(1) 奉先		(2) 乙薛	
九	八	八	六	七	一一
一七	一四	一九	二		

表について見ると、まず政事令（又は中書令）が南面の顯官であるのかかわらず、契丹人三一・漢人一九・未詳二と、その内譯がたしかめられ、未詳の二もその漢人でないことは明らかで、恐らく契丹人又は奚人と考えられるから、遊牧・農耕兩系民族の對比は、三三に一九と前者の多いことが指摘できる。そのうえ、契丹人三一のうち、皇親、皇族または后族の出のもの一七で、全體の半數をこえ、耶律・蕭兩姓の其の他に掲げたもののなかにも、例えば VI の (4) 阿沒里のように、遙輩可汗之後つまり準皇族と看做すべき遙輩帳族出身者があり、一方傳によつてその出自の明らかなのは、IV の (5) 夷臘葛（官分人）・ V の (4) 安搏（涅刺部人）・ VI の (4) 斜軫（迭刺部人）・ VI の (7) 室魯（六院部人）・ VI の (11) 烏古（稽特部人）の五人だけで、残りの八人については、その出自を究める手だてがなく、従つてその中にも皇親・皇族または后族の出のものもあり得ると考えられる。次に世代別に見ると、VIII 道宗朝の八事例のうち六までが漢人の貢舉合格者に占められている事實は、それ以前といちじるしく對照的であると認められる。政事令（又は中書令）に關するいくつかの問題を解く鍵は、以上の諸點にあるように考えられるが、それに及ぶまえに、百官志・中書省の條に見える諸職官のうち、とくに事例の多い政事舍人（又は中書舍人）および同政事門下平章事（又は中書門下平章事）について、参考までに表を作製しておく。

第二表 故事舍人（又は中書舍人）

表について見ると、ここでは事例のすべてが漢人であって、一三のうち四が貢擧合格者の出身と認められる。政事舎人と中書舎人との混同の例もなく、後者の事例がⅧ道宗朝に一つしか認められない点は、前者の事例がⅥ聖宗朝に集中して認められること、および本紀の記載としては聖宗朝にだけ求め得られることなど、特徴的であるというを得べく、これらの諸點をとくに参考として附記しておく。

		V 景宗	VI 聖宗	VII 興宗	VIII 道宗	
	契丹人					○
	貢擧合格者		(3) 杜防 (2) 張儉 (1) 高正	(1) 劉六符		四
	其の他	(3) 馬得臣 (2) 邢抱朴 (1) 室昉	(8) 吳克昌 (7) 馬保佑 (6) 張藏 (5) 牛藏 (4) 劉景用		(1) 馬鉉	九
	其の他・未詳					○

第三表 同政事門下平章事（又は同中書門下平章事）

Ⅷ 道 宗	Ⅶ 興 宗	Ⅵ 聖 宗	Ⅴ 景 宗	Ⅱ 太 宗	Ⅰ 太 祖	契丹人		
						皇親・皇族	耶律姓 其の他	漢人 貢舉合格者 其の他
		(2) (1) 弘 奴 古 爪	(1) ⊕ 賢 適					
(4) (3) (2) (1) ⊕ ⊕ ⊕ ⊕ 馬 胡 獨 兀 哥 呂 瀨 沒	(1) ⊕ 古 昱	(6) (5) (4) (3) 世 幹 碩 章 良 臘 老 瓦						
	(4) (3) (2) ⊕ ⊕ 特 阿 慈氏 末 刺 奴	(10) (9) (8) (7) ⊕ 排 約 孝 惠 押 直 穆						
(8) (7) (6) (5) ⊕ ⊕ ⊕ ⊕ 楊 嚴 阿 撒 九 壽 魯 抹 帶	(5) ⊕ 普 達	(12) (11) 圖 敵 玉 烈	(2) 道 寧					
	(6) 楊 佖	(13) ⊕ 劉六符						
		(10) (15) (14) 韓 韓 鄭 德 德 弘 威 源 節	(5) (4) (3) 室 除 慮 昉 室 俊	(2) (1) ⊕ 張 劉 居 礪 居 言	(1) 王 郁			
(9) ⊕ 孩 里		(17) 夏 行 美						其の他・未詳

		三							
一二		九		七		八		二	
一五								九	
一一		一一						二	
								(渤海) (回紇)	

表について見ると、同政事門下平章事と同中書門下平章事(表中姓名の上に㊦を附す)のあらわれ方は、一・二の例外はあるにしても、略々重熙一二年の改稱をさかいとしていて、政事令又は中書令のそれとは趣を異にしているといえるが、事例の全體についていうと、契丹人二七(奚をふくむ)に對し、漢人一一、その他㊦、總數の大半が遊牧系民族によつて占められ、さらに契丹人二七のうち、皇親・皇族又は后族の總數は一〇で、他にも出自の不明のものなかにこれに加えられるものもあるから、その點からすると、さきの政事令(又は中書令)の表について述べたとすると、一致するように考えられる。但し、漢人一一のうち貢舉合格者の出は僅か二にすぎない。

III 國初の政事令

前掲第一表によると、世宗天祿四(九五〇)年二月の政事省創置以前にも、政事令(又は中書令)になったものが七人あり、百官志・中書省の條に「太祖置官」と見えるのが、敘任事例によつて誤りないと確かめられる。Iの(1)耶律寅底石については、遼史卷六四・皇子表、德祖第四子(太祖之弟)寅底石、官職の條に

太祖遺詔。寅底石守太師・政事令。輔東丹王。

と見え、Iの(2)韓延徽・(3)韓知古およびIIの(3)趙延壽については、百官志・中書省の條、中書令の事例として

韓延徽。太祖時爲政事令。韓知古。天顯初爲中書令。會同五年又見政事令趙延壽。

とあるが、紀・傳の記載はこれと若干異なる。まずIの(3)韓知古の傳(遼史卷七四・契丹國志卷一八)には

征渤海有功。遷中書令。

とあって、Ⅰの(1)耶律寅底石の敘任とともに、天顯元(九二六)年太祖の渤海國親征直後の處置と解される。しいていえば渤海の故地に建てられた東丹國の王倍(太祖の長子)を輔佐する任にあったのが政事令、中央にあるのが中書令ととれないでもないが、この考えは以下の説明で正しくはあるまい。次にⅠの(2)韓延徽については傳(遼史卷七四)に

〔太祖天贊年間(九三—九五)〕命守政事令・崇文館大學士。中外事悉令參決。……〔太宗朝〕……仍爲政事令^⑧。

とあって、彼が太祖輔翼の功により、まず守政事令となり次いで政事令に遷し、その固有の職掌であるかどうかはわからないにしても、少なくともその任にあって「中外事悉令參決」せしめられたのであろうから、政事令が中央の職官であることに疑いはない。のちに述べるⅡの(1)蕭僧隱・(2)王郁に關し、遼史は時に政事令といひ時に中書令といひてゐるから、それは恐らく後年の改稱が原因となつて、兩者を混同したものにちがいない。さて、Ⅱの(3)趙延壽については、遼史卷四・太宗本紀下、大同元(九四七)年二月丁巳の條に

建國號大遼。大赦。改元大同。升鎮州爲中京。以趙延壽爲大丞相。兼政事令・樞密使・中京留守。中外官僚將士爵

賞有差。

とあって、前後の記載から太宗の後晉討滅と大梁入城による論功行賞に關係があると認められる。ところが傳(遼史卷七四)は、これと異なつて

會同初(九三八—)。帝幸其第。加政事令。

としている。次にⅡの(1)蕭僧隱については、遼史卷四・太宗本紀下、會同三(九四〇)年六月壬寅の條に

鴛發燕京。命中書令蕭僧隱。部諸道軍于長坐宮。

といひ、同じく會同五(九四二)年正月戊午の條に

詔政事令僧隱等。以契丹戶分屯南邊。

とある。両者が同一人なること誤りあるまいし、ここにはじめて政事令（又は中書令）の任にあるものの、具體的な事蹟が認められる。またⅡの(2)王郁については、遼史卷三・太宗本紀上、天顯三（九二八）年正月庚午の條に

以王郁。爲興國軍節度使・守中書令。

と見え、傳（卷七五）には、右のことは見えないで、末尾に

尋加政事令。

とのみある。さらにⅢの(1)耶律頽昱については傳（卷七七）に

世宗卽位。爲惕隱。天祿三（九四九）年。兼政事令。

とある。

以上の世宗天祿四（九五〇）年二月、政事省創置以前、政事令（又は中書令——正しくは政事令に統一すべきであろう）になった七人について見ると、この職官創設の時期は明らかでないにしても、少なくとも太祖の晩年には設けられていたと考えてよい。そして他に守政事令（又は守中書令——正しくは守政事令に統一すべきであろう）もあったと考えられる^⑩。しかし兩者の關係はわからない。一方その職掌について、Ⅰの(2)韓延徽の傳に見える記載は、必らずしも彼の帶びる官名と直接かわりのあるものとはとれないが、Ⅱの(1)蕭僧隱についての太宗本紀の二條の記載によると、政事令なる職官が契丹人を對象として、何等かの政務を擔當したことは疑いなきにちかい。そうだとすれば、のちの政事省（又は中書省）の諸職官が擔當した南面の政務とは、およそかけはなれたものとしなければならない。

次に前掲第三表によると、世宗天祿四（九五〇）年二月の政事省創置に先立って、同政事門下平章事（又は同中書門下平章事）に任じたものが、少なくとも三人いたことがわかる。百官志・中書省の條、同中書門下平章事の項にも

太祖加王郁同政事門下平章事。太宗大同元年。見平章事張礪。

とある。遼史卷七五・王郁の傳には

從太祖平渤海戰有功。加同政事門下平章事。

と見え、それが天顯元（九二六）年の太祖渤海國親征後の論功行賞にかかわりあいのあることがわかる。また張礪については、同書卷四・太宗本紀下、大同元（九四七）年正月癸巳の條、太宗の後晉討滅、大梁入城のさいの一連の論功行賞の一つとして

以張礪爲平章事。

とあり、傳（卷七六）にも

改右僕射・門下侍郎・平章事。

とある。一方、同書卷三・太宗本紀上、天顯五（九三〇）年三月壬午の條には

以龍化州節度使劉居言。同中書門下平章事。

と見える。これらによって見ると、同政事門下平章事（又は同中書門下平章事・平章事。——正しくは同政事門下平章事に統一すべきであろう）なる職官もまた、政事令と同様に太祖の晩年あたりに設けられたと考えられる。

ここで注意を要することは、さきに政事令となった王郁について述べたところと關連して、天顯元年征渤海役の功により同政事門下平章事となった彼が、天顯三年守政事令となり、次いで政事令に遷している事實から、ごく常識的には政事令・守政事令・同政事門下平章事の序列ある職官と解される。しかし當時はまだ政事省なる官署があつたわけではないから、職掌を同じくしたかどうかは全くわからない。さらに注意すべきは、同政事門下平章事の敍任が論功行賞として他官と兼ねて行なわれている點であり、またさきに引用した韓延徽傳によつて、守政事令になった彼が、その官名を帯びたが故では恐らくなく、その歷年の輔翼の實績によつて、「中外事態悉令參決」せしめられたと伝えられるのに對し、太宗本紀の蕭僧隱に關する二條の記載から、政事令なる職官が契丹人に對し或る種の政務を分掌するものと推測できるといふ、はなはだ對照的な點である。かくして臆測する。太祖は國初、契丹人に對して或る種の政務を擔當するものとして、政事

令なる職官を設け、具體的には例えば蕭僧隱に關して見える二條の記載にあるような政務を執らせ、やがてのち、政事令なる職官があるが故に、守政事令・同政事門下平章事の職官を設け、功臣に對する賜官の具としたのではあるまいかと。つまり、それぞれには高下の差はあつても、一連の職掌を有する職官ではなかつたと考える。

それでは國初太祖がかかる職官を設けた事由は何邊に存したのであろうか。もちろん建國前の契丹社會にも、或る種の政治集體があり、いくつかの官職が設けられ、それらの或るものが建國後も存置されたことは、これまでも論じたとおりである。しかし一方では、もっぱら唐制を範として國政の整備にも資しようとした。この場合、思いあたるのは、舊唐書卷四三・百官志二、門下省の項に

舊制。宰相常於門下省議事。謂之政事堂。永淳二年七月。中書令裴炎以中書執政事筆。遂移政事堂於中書省。開元十一年。中書令張說改政事堂爲中書門下。其政事印改爲中書門下之印也。

と見える事實である。もちろん唐制には政事令なる官名はなかつたが、宰相が國初を議する場所を古くは政事堂といい、その決議を記した文書には政事印を押捺したと解される。この故事に倣つて太祖は、國政の或る部分を執掌させるため、政事令なる職官を設けたのにちがいない。従つて當時は、その職掌にとくに北・南のどちらかという區別も判然とせず、結果的には、例えばさきの蕭僧隱に關して太宗本紀に見える二條の記載のような、のちの南面の政事省（又は中書省）の職掌とおよそかけはなれた政務も執つたものではあるまいかと考えられる。

とくに附言する。この時期に政事令になつた契丹人三人中二人が皇親・皇族の出、漢人四人と同政事門下平章事になつた漢人三人（うち王郁は前者と重複）が、凡て太祖、太宗朝に顯著な功を擧げた名臣ばかりで、彼等の積年の功に報いるための賜官の證據がこい。所傳の明らかでないのは、政事令蕭僧隱ただ一人にすぎない。

IV 創置の政事省

私は前章で太祖晩年あたりの政事令創置をもつて、唐制に倣いながらも、それとは異なつて、國政の或る部分を執掌するため、確たる制度もなく、いわば任意的に國政に顯著な事蹟、あるものを登用する職官であつたろうとし、のち政事令あるが故に、守政事令とか同政事門下平章事の職官も設けられたのであらうとし、高下の序列はあつても、一連の職掌を有したかどうかはわからないといった。そして以上の経過の故に、本章で問題とする世宗天祿四（九五〇）年二月の政事省創設がなされたと考える。すなわち國初以來、政事令以下の諸職官があり、任意的にもせよ任用の實績があつたので、これらをまとめて一省を設けるに到つたのではあるまいか。

しかし、ここに問題がある。遼史卷五・世宗本紀、天祿元（九四七）年八月癸未の條に

始置北院樞密使。以〔蕭〕安搏爲之。

とし、同年の末尾に

高勳爲南院樞密使。

とあるように、世宗即位の當初、北・南樞密院を創置し、契丹・漢の二元的統治制度を確立し、對漢人文治の最高機關として、南（漢人）樞密院がその機能を果たしはじめた以上、唐制の中書省に倣つた政事省の創置などは、官制上重複を免れないと考えられることである。もっとも五代にあつても、樞密院と中書省との關係は曖昧で、五代會要卷二四・樞密使によると、中書令が樞密使を兼ねたこともあり、樞密院が廢止されるとその職員は中書省に入り、復置されるとまた戻るといふようなことがあつたと記されているから、樞密院はほんらいの兵馬の權のほかに、中書省の職掌も有したように考えられる。宋代に入つて兩者を對置し、文武の二柄を分掌させたことは、宋史卷一一五・職官志一や文獻通考卷五八・職官考一二などに見えるところであるから、これはむしろ五代の二府の在り方に整理を加えたものといつてよい。遼の世宗が前後して南樞密院・政事省を設けたのも、いうまでもなく當時の（五代の）二府の在り方に倣つたものといつてよからうから、津田博士が「其の政事省（中書省）は樞密院と密接なる、また多少曖昧なる關係を有し、半ば之に附屬せし如き

ものなりしならん」といわれたのが、略々正鵠を得ているものと考えられる。そしてそれを證するがごとく、政事令は多く兼官で、とくに樞密使が兼ねる例が多く、紀・傳の記載も「爲政事令」より「加政事令」とある場合が壓倒的である。

しかしさらに考えると、遼制における樞密院は二院制をとっていて、五代のそれとは異なり、しかも南樞密院の職掌は漢人を對象とする文治にあり、漢人武官の選詮もその權能から除かれていたから、遼制における南樞密院と政事省との職掌の重複は、五代におけるより一層甚だしかったといつてよい。そしてこれを證するがごとく、さきに指摘した政事令を樞密使が兼ねる場合が多いとしたなかで、南樞密使の兼官がほとんど凡てであるという事實がある。

さて遼史卷五・世宗本紀五には、政事省創置の翌年である天祿五（九五二）年五月にかけて

詔。州縣錄事・參事・主簿。委政事省詮注。

と、その職掌の片鱗を示す記載がある。同書卷四五・百官志一には、すでに

契丹南樞密院。掌文詮・部族丁賦之政。

と、契丹南（漢人―南）樞密院の職掌として、文詮すなわち漢人文官選詮のことが擧げられてある。従つて漢人文官のうち、州縣の錄事以下下級官の選詮は政事省に委せられ、それより上級官の選詮に政事省は與かり得なかつたと解される。遼史卷四七・百官志四、南面方官・州刺史職名總目の項、州の第三等官たる錄事・參軍の條と、同じく縣職名總目の項、縣の第三等官たる主簿の條とに、世宗の詔を掲げてこのことが注記されてある。

ところで遼史卷三二・營衛志中、行營の條には、建國後も四季に應じて幕營地を移した皇帝に屬從する諸官のことを記し、北面官では契丹大小内外臣僚その他、南面官では漢人樞密院・中書省がただ宰相一員を摘するほか、少數の官を擧げ、かくして首都に殘留する宰相以下が執行する政務について

宰相以下還於中京居守。行遣漢人一切公事。除拜官僚。止行堂帖權差。俟會議行在所取旨。出給誥勅。文官縣令錄事以下更不奏聞。聽中書詮選。武官須奏聞。

といっている。世宗本紀およびその詔を轉記した百官志が、前述のように州縣の第三等官以下の詮選を政事省に委すとしているのに對し、ここでは縣の第一等官たる縣令以下としているのを、政事省から中書省への改稱、つまり時間の推移によつて、委任事項の範圍が擴大したと見てよいかどうかは、これだけの史料ではわからない。しかしともかく、州縣官といへば、専ら漢人を任用することをたてまえとし、南面官中の最多數者であり、直接人民に接する牧民官でもあるから、漢人を對象として文治を職掌とする南樞密院においては、最も重要な任務と看做してよい。そしてかかる諸官の敍任權が、政事省（又は中書省）の専決事項とされていたということは、それが南樞密院とは一體的な官署ではあるにしても、一個の行政府として南樞密院から獨立した權能も有する官署でもあったと考えられる。

このように見て來ると、國初創置された政事令なる職官が、前章に論じたように少なくとも具體例によるかぎり、契丹人を對象として或る種の政務を分擔したと考えられるのに對し、政事省なる官署の創置は、太祖朝の置官の集約ではあるにしても、その職掌は明確に南面にあり、唐制の中書省を模寫したものと看做してよい。それが、のちに中書省と改稱されるに到つた事由に連なるとも考えられる。そして遼史卷一五・聖宗本紀六、開泰三（一〇一四）年七月壬辰の條に

詔。政事省・樞密院。酒間授官釋罪。卽奉毋行。明日覆奏。

とあるのは、もとより當時の特異な事情に對する措置と解すべきであらうが、その背後には、さきに引用した營衛志の抽象的な記述を、具體的な場合によつて裏書きしたものとつてよい。すなわち營衛志によると、漢人文官の選詮には、州縣第三等官以下若しくは縣令以下をさかいにして、それ以下は政事省の専決、それより上級の職官については、南樞密使が堂帖を行つてかりに差遣しておいて上奏裁可を俟つわけであるが、かかる南樞密院の決定、より具體的にはその結果としての堂帖の作製には、ほんらい權限外であっても政事省も與かり得たと考えられる。假りに一步を譲つても、政事省が専決を認められた限界内で、現實に漢人文官の敍任を行つたことは、開泰三年七月壬辰の詔で明らかといつてよい。かくして政事省が、初期の政事令とは異なつて、南面の官署であつたことは、もはや疑いを容れない。そしてさきの上奏裁可

が、ほとんど形式上のことで、南樞密使の案どおり決定するのが例のようであるから、南樞密院を南面の最高機關といひ得るのに對し、政事省（又は中書省）はその下での一行政府と解することによって、兩者の辨別にも資することができる。

それでは、國初の政事令とはその性格を異にする政事省の創置により、その長官たる政事令の任用にも變化が生じたであらうか。前掲の第一表によると、この時期に政事令（又は中書令——正しくは政事令に統一すべきである）になったのは、IVの(1)よりVIIの(2)に到る總計三五人である。その内譯は、契丹人二四人（外に遊牧系民族出身二人）、漢人九人、さらに契丹人二四人のうち、皇親・皇族又は后族一人となっていて、全體の比重からいうと、皇親・皇族又は后族の出がいちばん多く、その傾向は、太祖朝に置かれた政事令におけると異ならない。次に前掲の第三表を見ると、この時期に同政事門下平章事（又は同中書門下平章事——正しくは同政事門下平章事に統一すべきである）になったのは、Vの(1)からVIIの(2)・(4)・(6)の(1)・(3)・(5)は中書省と改稱後の敍任例の總計二五人、その内譯は契丹人一六人、漢人八人、渤海人一人で、契丹人一六人のうち、皇親・皇族又は后族九人となっていて、全體の比重からいうと、皇親・皇族又は后族の出がいちばん多く、その傾向からするとさきの政事令におけると異ならない。従つて敍任事例から推すかぎり、南面の行政府となつた政事省にあつても、その主要な職官に任じられるものが、多くは遼室と特別な關係のある血筋から出たものといふことができる。しいていへば、第一・第三の兩表によつて、VI聖宗も晩年あたりから、漢人出身の歴任の官僚をもつてあてゐる事例が目立ち、それは前掲の第二表によつて、政事舍人（又は中書舍人——正しくは政事舍人に統一すべきである）にこの時期になつたのは、Vの(1)からVIIの(1)に到る一二人で、その凡てが漢人出身の歴任官僚の出である點とも一致する。そこで遼史卷六一・刑法志上に見える

往時。大理寺獄訟。凡關覆奏者。以翰林學士・給事中・政事舍人詳決。至是始置少卿及正。主之。

によると、大理寺の創置前には、政事舍人が翰林學士・給事中とともに、覆奏の詳審詳決に任じたことが知られる。い

までもなく國初以來漢人には律令をもつて臨むのが一貫した方針であつてみれば、徒罪以下は州縣で決するが、流罪と死罪とについて、大理寺で詳質せられ、さらに刑部から中書・門下に上られ、最後に天子に申奏されることを要したとする唐令の規定が、遼代どこまで行なわれていたかは別として、少なくともいづれかの機關で詳審詳決がなされたことは疑いを容れない^④。右の刑法志の記載は、聖宗開泰年間のことと推測されるが、大理寺の創置はこれに先立つ聖宗統和一二（九九四）年と考えられる^⑤。かくして刑法志の記載から、それ以前のことと知られたわけであるが、翰林學士・給事中・政事舍人が詳決に任じたのは、それらが當代の知識人であり、また經驗豊かな官僚の出をあてる例であつたからにほかなるまい。従つてそれは前掲の第二表から述べたところとも一致する。そしてまた政事舍人が實務を有し、従つて政事省が空名でなかつた證據にもできると思う。

V 改稱後の中書省

遼史卷一九・興宗本紀二、重熙一二（一〇四三）年二月戊申の條に

改政事省。爲中書省。

と見える。すなわち世宗天祿四（九五〇）年二月始建の政事省は、この時その名稱を中書省と改められたという。このことは、政事省そのものが、唐制の中書省の模寫と考えられるから、その意味で自然な措置と認められる。ところで、前掲の第一表によると、改稱後の中書省になったものは、VIIの(2)以下總計一一、その内譯は契丹人の四人に對し漢人は七人、そして契丹人の全部が皇親・皇族又は后族の出なのに對し、漢人のうち六人までが貢舉合格者出身、のこりの一人をふくめ凡て歷任の官僚によつて占められているという事實がある。一方、第三表によると、この時期に同中書門下平章事になったものは、VIIの(1)・(3)・(5)以下(2)・(4)・(6)は改稱前の敍任例）總計一二二人、その内譯は契丹人の六人に對し、漢人は五人、他に回紇人一人、そして契丹人のうち一人が后族の出なのに對し、爾餘は契丹人と漢人の別なく歷任の官僚の出なること

が確かめられる。第二表による中書舎人の事例は、Ⅷの(1)、漢人一人しかないので、その選任の傾向はつかめない。

以上の敘任事例から推すと、改稱後の中書省の主要な職官になったものが、歴任の官僚の出によって占められているという事實が指摘でき、それは、政事省と稱した時代の同じ諸職官が、すでに述べたように多くは遼室と血筋の連なるものによって占められている事實と、はなはだ對照的であるといつてよい。もちろん、改稱後にも遼室と血筋の連なるものが任じられた例は少なくはないし、逆にまえにも指摘したように、聖宗の晩年あたりから歴任の官僚の出をあてての傾向は、かなりはっきりあらわれてもいる。

このことは、興宗重熙一二(一〇四三)年一二月の改稱が、南面行政府の一官署たる政事省の質的轉換とまではいえないにしても、政事省創置の由來に基づく自然な措置以上のなにかを意味しているようにも考えられる。いうまでもなく政事省の創置には、一面ではいまふれた唐制における中書省の模寫のほか、他面ですでに述べた國初政務の或る部分を執らせるため置かれた政事令以下の職官を集約することにもあった。そして國初の政事令には、遼室と血筋の連なるものを任意的にあてることが多かったが、同じ傾向は政事省の政事令以下の任用にも踏襲された。否、そうみるよりむしろ、樞密院を頂點とする官僚體制の上に皇帝が聳え立つという體制より、まだ民族的な紐帶によって政柄を把持しようとする體制に留まり、従つて中國的な官府の顯要な職官にまで、遼室と血筋の連なるものを主として任用せざるを得ない實情にあったとみるべきであろう。ところが君主權の伸長に伴つて、歴任の官僚の出のものをあてても支障のない、むしろ官僚體制の上に聳える皇帝權の確立に資し得る體制が、徐々にではあろうが整えられて來た。すでに述べたように、聖宗の晩年あたりから、歴任の官僚の出のものをあてての傾向が、顯著にあらわれはじめている。興宗重熙一二年の改稱は、恐らくこういう經驗と自信とに基づいてなされたものに相違なく、従つてそれには國初の政事令以來の傳統を斷絶する意味があつたと考えられる。かくして私は、政事省から中書省への改稱をもつて、單純に政事省創置の由來に基づく自然な措置以上の、南面行政府としての確立の意義をよみとりたいと思う。

ところで前掲の第一・二・三表を通見すると、總じてこの時期の紋任例の少ないことに氣づく。これを、史料のあらわれ方による偶然的の結果と見るべきか、なんらかの意味によるものかは、もとよりわからない。しかしいま述べたように、重熙一二(一〇四三)年一二月の政事省から中書省への改稱が、南面行政府としての確立のための措置とする私見にして正しければ、結果的には南樞密院と中書省との機能上の關係は、一層曖昧なものたらざるを得ないこととなる。事實これを證するがごとく、金史卷五五・百官志一、樞密院の條の割注に、「初猶如遼南院之制。後則否」とある。亡遼の遺制を繼承した金初の樞密院を、同書卷七八・韓企先傳は

太祖……置中書省樞密院于廣寧府。……太宗初年。……移置中書樞密于平州。蔡靖以燕山降。移置燕京。凡漢地選授・調發租稅。皆承制行之。

といつて、少なくとも金初の廷臣が亡遼の南樞密院と中書省とを一官衙と解していたこと、並に同書卷三・太宗本紀、天會三(一一二五)年一一月の條に

以張忠嗣。權簽南京中書樞密院事。

と、これを裏付ける紋任例まであることは、遼末になると中書省の機能はすでに南樞密院に吸収されて、長官中書令のごときもなれば空名と化し、一種の稱號のようなものになっていたからと考えられる。前掲の第二・第三表とくに前者に、興宗の改稱後、中書舍人や同中書門下平章事になったものが乏しいのは、中書省がその機能を事實上南樞密院に吸収され、空名化していった證據に擧げることができると思う。

もちろん南樞密院と中書省(又は政事省)との關係が曖昧で、後者が前者になかば附屬するような状態にあったことは、政事省から中書省への改稱とかかわりのあることではないといつてよい。前掲の第一表にあるVの(1)平王隆先の東京留守、Vの(8)女里の契丹行宮都部署使、VIの(6)耶律阿沒里の北院宣徽使にして、それぞれ政事令を加官されている事實^⑤、つまり南樞密院と關係の直接ない職官で政事令を兼官しているということは、それがすでに一種の稱號として用いられてい

たからと考えられる。しかし、そうはいつでも政事省が南面の行政のうえに、實質的な權能を有したことも嚴然たる事實である。州縣第三等官以下の漢人文官選詮を專決し得るといふ權限を、過少評價することは許されない。それが地位としては低いものであつても、被征服の漢人民衆に直接接する牧民官であり、數においても最も多いわけであるから、とくに遼のような國家の場合、重要な役割を擔うものと認めねばならない。政事令に、遼室と血筋の連なるものをあてゐる例が多かつたのも、政事省が以上のような實權を握つていたからであつて、それが單なる稱號のようなものでなかつたにより、證據である。従つて政事省（又は中書省）と南樞密院との關係が曖昧で、前者が後者になかば附屬するような状態にあつたことは、創建當初からのことであつたにしても、その傾向は時代とともに強まり、政事省が中書省と改められ、南面の行政府として體裁が整えられるに到つたのとは逆に、その權能は南樞密院に吸收され、ほとんど實務なき空疎な官署にすぎなくなつたと考えるのが妥當であらう。

VI 中書省の諸職官

遼史卷四七・百官志三、南面朝官・中書省の條に列擧された諸官のうち、上來述べ來たつた三職官以外で瀕出するのは、參知政事である。これには同書卷一三・聖宗本紀四、統和一二（九九四）年七月己卯の條に

以翰林承旨邢抱朴參知政事。

とあるのを初出として、遼末まで敍任事例が瀕出し、一々は掲げないが、整理を加えてみると、例外なく漢人出身者であることが確かめられる。ところが爾餘の諸職官については、百官志に附記された敍任例のほかに、ほとんど史料が求められない。しかし總じていうと、大丞相について太宗朝の敍任例が見えるのは、だいたいにおいて聖宗期以後の敍任例であることに氣づく。百官志は、大丞相を中書令の次に掲げているが、遼史の紀・傳によると、これになつたのは太宗朝の趙延尋、景宗朝の高勳、聖宗朝の韓德讓、興宗朝の蕭孝穆の四人だけで、それらはいずれも當代の名臣にかぎられてい

る。^⑤ してみるとそれは、百官志が次に列した左丞相・右丞相とともに、功勞顯著な名臣があった場合、これに賜與する實職なき官名と、これをとるべきだと思ふ。そうだとすると中書省（又は政事省）には、中書令（又は政事令——以下準じて略す）を長官とし、その下に知中書事・中書侍郎・同中書門下平章事、および堂後官・主事・守當官・令史を統屬する參知政事があり、他に中書舍人院と右諫議大夫・右補闕・右拾遺よりなる右諫院とが屬したことになる、それは全く唐制の模寫にほかならないといふことができる。そしてこれらが、それぞれだけの實務を有したかはわからないにしても、その敘任例が、すでに述べたように聖宗朝あたりより見えるのによると、聖宗の世代ごろにはともかく唐制における中書省に倣った政事省が、かたちだけは整えられるに到つていたと考へて誤りあるまい。

VII 門下省と尙書省

遼の南面朝官には、中書省のほかは門下省・尙書省も名目上は設けられ、従つて三省の凡てが模寫されていたことは、百官志三によつて疑いを容れない。しかし三省は唐にあつてさえ官制上の職掌と實際の事務との間に一致しない點が多く、名實の乖離は五代に及んで一層甚だしくなつていたから、遼がかかる制度を採つてどのように實務に適用したかは、すこぶる疑わしいとせねばならぬ。

門下省の長官たる侍中の多くが、別に實務を有し、また致仕の後に加官されているような例もあつて、それが空名と等しく、一種の稱號のごときものとして用いられたことは疑いなきにちかい。また直接民治と交渉ある六部のごときも、遼代官職として存在したことは敘任例もあつて疑いないが、南樞密院が廣範な實權を有したかぎり、ほとんど空名に等しかったものと解するのが至當と考えられる。ここで問題になるのは、三朝北盟會編卷二一所引の亡遼錄に

中書・門下共一省。兼禮部。有堂後・主事・守堂官一員。尙書省併入樞密院。有副承旨。吏房・兵房・刑房承旨。戸房。廳房即工部也。主事各一員。

とある記載である。亡遼の官制を概述した亡遼録の記載は、遼史百官志の史料ともなったと認められる。これによると中書・門下の二省は一つにまとめられ、尙書省は南樞密院に併入されていたと伝えられる。遼の何時頃のことを傳えたものであるかは判然としないが、三省の各職掌のうえからすれば、略々正鵠を得ているものと認められる。つまり遼制における三省のうち、ともかくも實務を有したのは中書省だけで、門下・尙書の二省はほとんど空名に等しく、その職官は單なる稱號に過ぎないものであったと考えて恐らく誤りあるまい。

む す び

本稿は、遼の三省、なかならずそのうち最も重要な中書省を中心に論じたところのものである。いうまでもなく唐の三省六部の組織は、唐末あたりから實質的には形骸を留めるだけになり、五代を経て宋に到る間に、全く別個の新しい組織が出来上っていたわけであるが、こういう中央政府組織の變容の經過を、中國王朝の制に倣おうとした遼がどのように受けとめようとしたかは、遼の南面官制について考える場合、すこぶる興味のある問題といつてよい。しかしこの問題は本稿で扱った範圍のなかだけでは解決できないから、後日に譲つていまは述べない。本稿では、遼の三省、なかならず中書省の機能の變遷に焦點をしばつた。そして遼が、國初唐の中書省に倣つて政事令を置き、遼室と血筋の連なるものか肇國の功臣を任用して、國政の或る部分を擔當させ、のち政事省なる官署を設けて、南樞密院のもとで漢人文治の行政官署とした。しかし、諸職官とくに長官など主要な職官の敍任には、依然として國初採られた方針が堅持されたが、聖宗の晩年あたりから、歴任の官僚の出のものをあてて例も多くなり、やがて名稱も中書省と改められて、南面官としてのかたがが整えられたのに、職掌の點では逆に權能を喪失して、漢儀とくに嘉儀・賓儀などのさい或る種の役を演んずる位は高いが實權のない、いわば稱號のようなものに、その長官名も變わつていった。以上が本稿のあらましであり、そこから私は南面官であるのに獨特の敍任の仕方が採られた點に、注意を喚起しておいた。凡そ遼の官制について考える場合、官僚體

制の上に聳え立つ專制的な皇帝權の確立の方向と、依然として古い氏族的な紐帶のおりなす面とのからみあいの問題が、常に重要な課題となり、それが遼の國家としての性格を究める、少なくとも重要な手がかりになるということを、これまで私はくりかえし主張して來た。本稿で扱ったごとき南面の顯要な職官にまで、遼室と血筋の連なるものを任用した場合が多かったという事實は、依然として古い氏族的な紐帶のおりなす面が、中國的な官僚體制の確立への方向を障碍する要素となったと認めることが可能で、かかるものを振り切れなかったところに、中央集權的な專制官僚體制を指向しながら、その限界を認めざるを得ず、遼國を中國王朝風の國家とは少なくともいいきれないとする、年來の主張を重ねて確認せざるを得ないものがある。もちろん、唐の三省六部の組織は、天子の權限を貴族の壓力でせばめるためのものであり、それなればこそ別個の新しい組織に忠實な官僚を排して天子獨裁政治を確立する努力がなされたわけである。遼帝が自己の血筋に連なるもの、外戚もしくは宮廷寄生貴族的な特定の功臣を三省の主要な職官に排したのは、これとは異なる次元に立つて君主權を維持し強化して行こうとしたからで、三省が貴族政治の場であつた故事に基づいたわけではあるまい。

遼の三省が、漢人文治の最高機關たる南樞密院に統屬し、なかばこれと一體のごとき曖昧な状態にあつた事情は終始變わらないが、その傾向は時代とともにいちじるしくなつていったと考えられる。そして中書省とは、實は中書・門下兩省の合體したもの、従つてほんらいなら中書門下省と稱すべきを、略して中書省と稱したこと（同中書門下平章事なる官名の存在も、右の事情によると考えられる）、および尙書省が南樞密院に吸収されていたことは、略々誤りないところであるから、ともかくも或る職掌を有したのは、三省のうち中書省のみといつてよい。本稿が中書省を中心に論じたのは、そのためであり、従つて遼史百官志に三省の職官が列擧されているからといつても、それらが實務を有したといえないのはもとよりのところである。

- ① 遼朝鞠獄攷(三六・四)・遼朝林牙翰林攷(三六・六)・遼朝宣徽院攷(三七・一)・遼朝御帳官攷(三八・一)・遼朝監察官攷(三八・四)・遼朝于越攷(四〇・一・三)・遼朝宰相攷(四〇・六)・遼朝惕隱攷(四一・五・六)
- ② Vの(7)胡魯古は、遼史卷八・景宗本紀一、保寧五(九七三)年三月乙卯の條に、「胡魯古兼政事令」とあるのにより採擇した。しかしこれは單獨史料である。一方、Vの(8)女里は、卷七九・傳に、「逸其氏族。補積慶宮分人。……(景宗)卽位。以翼戴功。加政事令」とあるのによつた。詳しいことはわからないが、名から遊牧系民族の出と考へてよからう。
- ③ 遼史卷七九・傳に、「遙輦朝古可汗四世孫。……統和初。皇太后稱制。與耶律斜軫參與國論爲都統。以征高麗功。遷北院宣徽使。加政事令」とある。
- ④ 卷七八・傳、卷一〇三・蕭韓家奴傳(祖父中書令安搏)、卷八三・傳、卷八一・傳に、それぞれよつた。ただ、夷臘葛と斜軫については、傳の方には政事令になつた記載は洩れている。
- ⑤ 第一表Vの(6)高勳・VIIの(2)馬保忠・IXの(1)蕭奉先の三人は、契丹國志の紀・傳から採擇した。このうち高勳について、卷六・景宗紀の卽位年に「以知政事令高勳爲政事令」とあり、知政事令なる官名をもらつたように解し得る。恐らく知中書省事の前身で、政事省の次官と解すべきであらう。
- ⑥ VIの(1)夏行美は、遼史卷八七・傳に「渤海人」と見え、VIIIの(9)孩里は、同書卷九七・傳に「回紇人」とある。
- ⑦ VIの(1)蕭圖玉について、遼史卷九三・傳には、「統和間。……

- ……拜駙馬都尉。加同政事令門下平章事」といい、同書卷一五・聖宗本紀六、開泰六(一〇一七)年二月甲戌の條には、「以公主養哥殺無罪婢。駙馬蕭圖玉不能齊家。降公生爲縣主。創圖玉同平章事」とある。前者の官名中の令の字は誤入と見られ、後者の官名同平章事は同政事門下平章事の略と考えられる。同じことはVの(2)蕭道寧について、同書卷一〇・聖宗本紀一、乾亨四(九八二)年一〇月己未の條に、「同政事門下平章事萬道寧領本部軍。駐南京」といいながら、同じところに統和元(九八三)年三月辛巳にかけて、「以國舅・同平章事蕭道寧。爲遼興軍節度使」と見えてゐるから、後者を前者の略とする考えは疑いを容れない。そうだとすると遼史には、同平章事を帶びるものが、他にも聖宗朝に二人・興宗朝に一人求められ、また同平章政事もこれと同じとすると、さらに聖宗朝に一人あることになる。これらを第三表に加えると、VI聖宗・契丹人耶律姓其の他の欄に耶律普寧、同じく漢人其の他の欄に趙延煦・劉京、またVII興宗・契丹人耶律姓其の他の欄に耶律求翰が入ることになる。従つて全體の數字は、契丹人二九・漢人一三・其の他二、さらに契丹人二九のうち皇親・皇族又は后族の數一〇と改めねばならないことになる。
- ⑧ 契丹國志卷二・太宗紀は、卽位年(九二六)にかけて「以韓延徽爲政事令」とあり、その敘任の時期が一層明確にされている。
- ⑨ 蕭僧隱について、遼史卷四・太宗本紀下には、會同三(九四〇)年六月壬寅の條に「中書令蕭僧隱」と見え、同五年正月戊午の條に「政事令僧隱」とある。兩者は同一人と見てよからう。王郁については、太宗本紀上には中書令とあり、傳には政事令とある。

⑩ 契丹國志卷二・太宗紀と卷二六・傳にも、略々同じことが見える。

⑪ 契丹國志卷一七・麻答（太宗之從弟）傳によると、太宗朝のこととして「劉煦判中書」と見える。判とは以大兼小のいいと解されるが、彼の兼ねた官名が中書令かどうかはわからない。

⑫ 先の註⑦によって附加された四人は、凡てこの時期の事例であるから、本文の數字は、總計二十九人、その内譯は契丹人一人、漢人一〇人、渤海人一人となり、契丹人一人のうちに、皇親・皇族又は后族九人、漢人一〇人のうち貢舉合格者一人と改めねばならないことになる。ただし、全體の傾向としては本文で述べたところと異ならない。

⑬ 拙稿・遼朝鞠獄攷（法律論叢三六―四）IV遼代の獄訟、2漢人の獄訟の節參照。

⑭ 同右。Ⅲ南面中央官制における獄訟官、2大理寺の節參照。

⑮ 拙稿・遼朝林牙・翰林攷（法律論叢三六―六）。Ⅱ南面の官制、1翰林院およびⅢ大林牙院と翰林院の各章節參照。

⑯ それぞれ遼史卷七二・同卷七九・同上の傳による。

⑰ 前章で述べたように、百官志三・南面方官の項の記載は、世宗本紀の詔を注記した故か、ことさらに政事省とあり、また刑法志一の記載も、大理寺始建前のことゆゑ當然かも知れぬが、同じく政事省とある。ところが中書省又はその職官の職掌を傳える記載は全く認められず、逆に禮志によると、なかでも嘉儀と賓儀との次第を敘したなかに、しばしば中書令が、儀式の進行に重要な役を擔うことが見え、そこには政事令なる表現は全く認められない。以上は偶然かも知れぬが、政事省と稱したさいには、國政上明確な權能を有したのに反し、中書省と改稱後

は空疎な實權なき官府と化したとする私見を、裏書きするようにもとれる。そしてそれが顯要な職官にあるものに加えられる稱號のようなものであったと考えられるところから、とくに漢儀のような儀式の壯重さを誇示する必要がある場合、重要な役目を負われたのではないかと考えられないこともない。

⑱ 前掲の第一表にたると、蕭孝穆を除く三人は、いずれも政事令も加官されている。なかでも遼史卷四・太宗本紀下、大同元（九四七）年二月丁卯の條に、「以趙延壽爲大丞相兼政事令・樞密使・中京留守」とあつて、趙延壽の場合も同時であり、さらに同書卷八二・耶律隆運（韓德讓）の傳によると、「……加守太保。兼政事令。……久之拜大丞相」とあつて、韓德讓の場合にはさきに政事令を兼ね、のちに大丞相を拜している。百官志が中書令の次に大丞相を排した理由はわからないが、敘任事例からすると適當とは考えられぬ。さらに遼史卷一一六・國語解に、「高墩。遼排班固有高墩・矮墩・方墩之別。自大丞相至阿札割只。皆墩官也」と、儀式などの場合、群臣の坐する數物に高下の別あることを述べ、數物を用いることを許された墩官の最上位に大丞相をおいている。これらによつて考えると、大丞相とはもともと中書省の職官ではなく、功業多き名臣に賜與される稱號のごときものと解すべきであらう。それにもかかわらず、中書省の項、中書令の次に排しているのは、中書省が職掌を失ひ、中書令が稱號として用いられるに到つたころの記事ととるべきかも知れぬ。左丞相・右丞相もこれに準じて考えるべきこと、本文に述べるとおりである。

⑲ 門下・尚書兩省については津田博士の見解に、今のところ附加する何物もないから、詳説はしない。（津田論文三六―四頁參照）